

## 映画時評

*Sorstalanság* の

映画化に寄せて

盛田 常夫

ノーベル文学賞を受賞した小説 *Sorstalanság* の映画化が完成した。

撮影技師としてアカデミー賞候補にもなったコルタイ・ライオシュが監督を務め、映画音楽で知られるエニオ・マリツォーネが音楽を担当。二月一〇日からハンガリーの映画館で一斉に封切られた。ノーベル賞受賞作の映画化ということでハンガリー国内の関心は高く、観客動員も記録を更新している。

映画化の難しさ

作家ケルティース・イムレ自身、ノーベル賞受賞前に、映画化のため

の脚本を出版している (Kertész Imre, *Sorstalanság-filmforgatókönyv*, Magvető, 2001) が、もちろん今回の映画化にあたっては、これを参照しつつ、コルタイが脚本を用意した。小説の概要はすでに『ドナウ通信』(二〇〇三年新春号)で紹介したので、ここでは繰り返さない (評者のサイト <http://morita.tateyama.hu> から PDF

版をダウンロードできる。映画はハンガリー語だが、ストーリーは小説を踏襲しているのので、評者の概要を目を通されれば、ハンガリー語が分からなくても映画の鑑賞可能)。

*Sorstalanság* をどう日本語に訳すか。小説の日本語版 (岩崎悦子訳) に使われた「運命ではなく」という訳語は内容を現す訳として適切だが、名詞の訳語としては何かすっきりしない。筆者が使った「運命の不在」というのも、大袈裟すぎて、適切ではない。訳語を選ぶ時には、小説全体に流れる主題やモチーフを勘案す

るのだが、私小説的な *Sorstalanság* の主題やモチーフは明瞭とはいえない。それが訳語の選択を難しくしている。

この小説は作者の少年時代の体験をそのまま私小説的に展開したものであるから、一人の少年のナイーヴな感覚がそのまま表現されている。だから、明瞭な思想や考え方が展開されている訳ではなく、体験を淡々と語ること小説が構成されている。とくにドラマ性がある訳ではないので、映像化する際には、テーマの表現の仕方や、見せ場をどこにおくのが難しい。

文学と映像

原作があるとはいえ、小説と映画は別の芸術作品だと割り切る必要がある。原作がある多くの映画作品では、原作にないストーリーや場面を駆使してドラマ性を高め、映画作品として仕上げる方法が採られる。

*Sorstalanság* の映画化では、ストーリーそのものは原作に忠実だが、全編を通して、アウシュヴィッツ性（ユダヤ人の悲惨さ、ナチスドイツの残虐さ）を強調することに終始している。これは映画化において附加されたものだ。しかし、この点は原作をどう解釈するかという小説理解にかかわる重要なポイントである。その解釈の是非が、映画化の成否を左右していると言ってもよい。筆者が気づいた限り、小説と著しく異なる設定がなされ、アウシュヴィッツ性が強調されている場面は以下の通りである。

主人公の少年がブダペストの収容所に集められてから労働キャンプへ出発する場面。この場面はユダヤ人の一時収容所としてかなり詳しく描写される。しかし、原作には、この場面の詳細な記述はない。原作では一時収容所から労働キャンプへの出発は淡々と描かれており、収容され

てから出発まで、時間的に間もない（数日の）設定になっている。ところが、映画では数週間（数ヶ月？）も、雨風の当たる吹きさらしの場所に、市内の各所から集められた多数のユダヤ人が閉じこめられたことになっていく。原作を読んでいる者が、最初にとまどう場面だ。

この場面の時間的経過は、これに続く場面にそのまま引き継がれる。ブダペストからアウシュヴィッツへの移動の場面では、貨車に雪が吹き込み、凍えながら移動する設定になっている。原作では真夏だが、映画では晩秋に変わっている。労働キャンプへの移動の悲惨さを描こうとしたのだろうが、小説と異なる設定に違和感を覚えるところだ。

原作では、最初に到着したアウシュヴィッツで、主人公を含めた少年達の収容所を観察した様子が叙述されているが、この部分の映像はない。ブッフエンヴァルドの労働キャン

プに到着してから、映画は褐色のフィルムターがかかった白黒映画に変わる。もちろん、労働キャンプの暗さを強調するための手法である。殺風景で、常に天候が悪く、雨降りが続く。小説では、労働キャンプの周辺は、アウシュヴィッツとは異なる緑豊かな森林地帯として描かれている。小説ではキャンプにおける物々交換の様子が少年の興味深い体験として描かれている。他方、映画では生存をかけた喧噪になっている。

小説で描かれていたキャンプ内病棟の看護師や医師の観察などは省かれている。主人公の少年が関心をもったキャンプ内での収容者の専門分野や人間的な触れ合いは、ほとんどカットされている。

#### アウシュヴィッツ化に墮したか

*Sorstalanság* のノーベル賞受賞は、ナチの残虐性を告発するアウシュヴィッツ文学ではないからだろう。今

更アウシュヴィッツ文学でもあるまい。アウシュヴィッツ文学なら、すでに優れた作品が多数出版され、映画化されている。

一人の少年が、何の変哲もない日常生活から一瞬のうちに非日常的な世界へ引っぱり込まれる。しかし、その非日常的な世界に、主人公が別の日常的な生活を見いだすところに、他のアウシュヴィッツ文学とは違う *Sorstalanság* のテーマがあったはず

である。ユダヤ人の運命を嘆くのではなく、労働キャンプでの人と人の繋がりや生活を淡々と描き、そこに人が生きる日常的な世界があることを描いた。「運命ではなく」という表題が付けられた所以だろう。だから、このテーマを活かす映画を製作するとすれば、労働キャンプのアウシュヴィッツ性を強調するのではなく、主人公の観察や体験、それから各種の人間関係を精緻に描く必要があった。

しかし、コルタイはこの視点を排し、労働キャンプの悲惨さを描くことに単純化したために、原作の主題を失ってしまった。そうなれば、ただのアウシュヴィッツ映画になってしまう。

出来上がったばかりの映画をベルリン映画祭に押し込んだが、評判はイマイチだった。並のアウシュヴィッツ映画になってしまったのは、審査員や観客に訴えるものがない。

#### 優れた小説か

これまで述べた理由から、評者は、*Sorstalanság* の映画化は成功していないと考える。他方、それはコルタイの原作理解の問題だけとは言いやれない。ケルティースの小説そのものが、テーマを十分に描き切った優れた文学作品なのだろうか。

ケルティースの小説が面白いかと聞かれて「面白い」と答えるハンガリー人は少ないだろう。読み易いか

と聞かれたら、「読みにくい」と答える人の方が多いだろう。文章がうまく思うかと聞かれたら、ほとんどの人は首を横に振るだろう。物書きとしての歯切れや構成が良いとはとても言えない。ノーベル賞をもらったから優れた小説、小説家だとは言えない。受賞には運とか政治的な関係とか、諸々の条件が働いている

テーマが不明瞭でドラマ性に欠ける原作の映画化には、ストーリーを盛り上げる設定が必要になる。ところが、アウシュヴィッツの悲惨さを強調すればするほど、原作のテーマから外れ、ただのアウシュヴィッツ映画に墮してしまうのである。

#### それにしても思うこと

今年アウシュヴィッツ解放六〇年、日本の戦後六〇年。戦後これだけの時間を経ても、ナチスドイツの犯した罪の告発は、これでもかと思わせるほど、後を絶たない。二〇〇

三年のアカデミー賞受賞作「ピアノスト」も、ワルシャワの対ナチ蜂起を題材にしたものだった。こういう映画が国際的な賞賛を浴びる度に、ドイツ人はどのような感情を抱くのだろうか。これでもかと、ナチの残虐行為を見せられて、ドイツ人は何を感ず、何を思うのだろうか。過去の愚行を恥じ、歴史がドイツ人を赦していないことを肌で感じ、贖罪を乞うのだろうか。多数の人命を奪った償いは、六〇年程度の時間では済まないのか。というより、ナチストイツの犯した過ちを人類の愚行として記憶し、常に警鐘を鳴らし続けることでしか、人類には再犯を防ぐ手だてがないということではないか。

たことなど知らない。逆に、日本のアジア支配を過ちとして殊更に強調するのは自虐史観だと騒ぎ立てている人たちがいる。しかし、今の学校ではその「自虐史観」の歴史すら教えていない。古墳時代に時間をとつても、現代史を詳しく教えていない。だから、日本の子供たちは、日本人が原爆の被害者だと知っていても、残虐行為を行った侵略者だったなどとは思ってもよらない。まして、北朝鮮の拉致問題がある現在、「日本人は被害者」という意識しかない。日本人が健忘症に陥っても、被害者はそう簡単に忘れるわけにはいかない。中国や韓国が日本人の歴史認識に苛立つのは、当然だろう。

会」などの烏合の衆が政治を取り仕切っている。そういう輩が天皇を元首と規定する憲法改正を急いでいる。時代錯誤も甚だしい。教育委員会が学校行事での国歌斉唱・国旗掲揚を監視するというのも、文明国では珍しい日本ならではの強制管理だ。愛知万博の弁当検査も異常なら、持ち込み弁当が首相の一言で許可されるというも異常だ。それを異常だと思わない日本人が怖い。お上の通達を愚直に守る行動は、北朝鮮の独裁制にも共通するアジア的専制政治を支える行動規範だ。国連安保常任理事国になる資格がないと批判されて、返す言葉があるだろうか。歴史を反省することなく、カネで地位を買おうとする経済アニマルだと見られても、反論の仕様がな

本人は皆、大日本帝国時代の蛮行を忘れ去った。ドイツと違って、日本の蛮行が映画になって日本で上映されることはない。日本の若者の多くは、日本が朝鮮や中国の抑圧者だっ

八月一五日に靖国神社に集合する人々は、まさに軍国の母を懐かしみ、大日本帝国の軍服を着て英霊を称えている。そういうアナクロの宴の象徴になっている神社詣でに一国の首相が固執し、「皆で靖国を参拝する

ドイツと日本。この違いはどう説明されるのだろうか。少なくとも国際的な場で仕事をする日本人は、このことを良く考えておくべきだろう。